

第2回 研究部会 研究保育 令和8年6月17日 三先幼稚園

研究主題「自ら体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児を育てる」

<保育の視点>

- ①幼児が自ら体を動かして遊ぶことを楽しんでいる姿とはどのようなものであったか。
- ②幼児が体を動かす遊びを楽しむことにつながった教師の教育的意図をもった働きかけはどのようなものであったか。

研究保育内容

<全体での遊び>

○ボール投げ・輪投げ

- ①天井に吊るしたペットボトルに輪が入るよう、投げ方や投げる回数を変えながら繰り返し投げていた。
- ②新聞ボールを上から力を入れ勢いよく投げたり、下からスピードを落として投げたりするなど、力を調整して投げられるように、高さや種類の違う的が用意されていた。



○たんけん迷路

- ①いろいろな道を選択しながら、トンネルに隠れたり、果物にジャンプしてタッチしたりなど、教師や友達と一緒に進むことを繰り返していた。
- ②跳んだり、くぐったりなど、いろいろな姿勢をとりながら進むことができる環境が用意されていた。

○サーキット

- ①自分でコースを選び、一本橋を両手を広げてバランスをとって渡る、トランポリンで高く跳ぶなど、いろいろな体の動きを繰り返ししていた。
- ②自分なりに挑戦したり、工夫したりできるように、難易度の違うコースを用意し、その姿を教師が認めたり、励ましたりしていた。



○裸足での遊び

- ①ボトルキャップやコルク、スポンジなどの感触の違ういろいろな道を、裸足で跳んだりバランスをとったりして歩いていた。
- ②感触の違いによって自分の体の感覚を十分に味わえるように、いろいろな素材を使って道をつくり、幼児の気付きや思いを受け止めていた。



○体操・ダンス・音頭

- ①好きな曲を選び、手具を身に着けて客の前で自分なりにイメージをもって踊っていた。
- ②教師がそばにいて安心し、見てもらう嬉しさや満足感を感じられるように、認めたり、遊びに加わったりしていた。



<各クラスでの遊び>

○3歳児「生き物サイコロで遊ぶ」

- ①カニやカエルなどサイコロで出た目の生き物になって、水に見立てたスズランテープの下をくぐったり上を跳んだりくぐったり、隠れたりしていた。
- ②イメージを膨らませて表現することを楽しむことができるよう、一人一人の動きを具体的な言葉で補ったり受け止めたりしていた。



○4歳児「ボールで遊ぶ」(チーム対抗で積んだ箱を倒す)

- ①段ボール箱を両手で持って積み上げたり、友達と協力して倒れるように何度も新聞ボールを投げたりしていた。
- ②考えたり、工夫したりする姿を認める、的に当たった喜びに共感するなどしていた。



○5歳児「サーキットで遊ぶ」(全体のサーキットと別の5歳児の実態に合わせた内容)

- ①力を入れて台車を動かしたり、勢いをつけて坂道を駆け上がったりすることを楽しんでいた。
- ②自分で遊び方を考え、力いっぱい挑戦したり、友達と刺激を受け合ったりできるように、そばで見守り、適時、励ましたり、他児に知らせたりしていた。

分科会(各グループの意見より抜粋)

- ・「やってみたい」と思える環境を幼児とともにつくっていたことで、教師がそばにいる安心感をもって伸び伸びと遊んでいた。
- ・一人一人がどんな遊びをどのように楽しんでいるか、どんなことに挑戦したいかなど、捉えることが大切だと思った。
- ・遊ぶ場、遊び方の選択肢が沢山あることで、自ら体を動かして遊ぶ意欲を高め、繰り返し試しながら遊んでいた。
- ・異年齢の発達段階に合わせて、どの子どもでも楽しめる環境だった。
- ・丁度よい高さ、音の鳴る仕掛け、少し難しいコースなどがあることで、繰り返し遊びを楽しんでいた。ねらいをもった環境の工夫や、教師も一緒に遊ぶことを楽しむ大切さを感じた。
- ・迷路では、自分で道を選びながら、友達と一緒にゴールまでいろいろな動きで進んでいくことを楽しめるように、安全面を配慮した様々な仕掛けや環境の工夫があった。
- ・サーキットでは、安全に遊べるように教師がそばで見守り、その都度安全な遊び方について声をかけたり、環境の調整をしたりしていた。
- ・5歳児の振り返りでは、自分なりの言葉で、体のどの部分を使ったか、どうなったかなどを言語化していた。年齢や時期に合った振り返りの進め方や、活動内容の工夫をすることが大切だと感じた。



指導講評

講師 大阪市総合教育センター 教育振興担当 基本研修グループ 指導主事

- ・ボールや輪投げの場では、自分なりの目的をもって、腕を大きく振りかぶって投げたり、力加減を調整したりするなど多様な動きが多くあった。何度も繰り返して遊べる環境があったからこそ、さらに意欲が高まり、試行錯誤する姿が見られた。音が鳴ったり、回転したりするなど様々な仕掛けがあることで心が動くきっかけづくりが沢山されていた。
- ・迷路では、いろいろな道があり、その中に長いトンネルくぐりや果物タッチ、体をひねる動き、小さくなって隠れるなど様々な動きがあった。いろいろな素材を取り入れ、5歳児が自分たちで環境をつくってきたことで、繰り返し遊びを楽しむ姿につながった。
- ・ダンスや体操の場では、舞台の向きを変えることで、廊下から来る幼児にも見えやすかったり、手具が沢山あったことでイメージが広がったりして、音楽に合わせて踊ることを楽しんでいた。
- ・廊下は生き物になって動くなど、走らずに楽しめる工夫がされていた。
- ・リズム室は周りにサーキット、中央に裸足で遊ぶ場があった。裸足の場では、大きなマットや裸足で歩けるコースがあり、静の時間も確保されていた。サーキットでは、教師が近くにいることで、安全に遊べるので、自分なりの方法で挑戦したり、「できた！」という気持ちを味わったりしていた。
- ・振り返りがあることで、次につながっていく。相手から認められることで、自信がついたり、さらに意欲をもったり、共感してもらえる喜びになったりする。また、相手の話を聞くことで、自分のことのように考えたり、新しい刺激を受けたり、友達との関わりが広がったりして、「明日はこうしたい」という期待の高まりにつながる。
- ・園内の様々なキャリアステージの教職員で、連携を取り合って保育を進めていくことが大切である。



研究保育を通しての学び

- ・教材研究や情報収集をして、幼児の「やってみたい」という気持ちが膨らむような魅力的な環境や遊びの内容を考え働きかけることが、幼児が意欲的に遊びを楽しむことにつながると分かった。自分で選択できる、少し難しさがある環境は、「やってみたい」「頑張ったらできそう」などの気持ちを高め、繰り返し遊びたくなることが分かった。
- ・一つ一つの遊びだけでなく、廊下も活用することで、遊びが広がると学んだ。
- ・教師がそばで遊びを見守り、一緒に遊びを楽しむことで、安心して遊んでいた。今の時期にこのような経験を積み重ねていくことが、今後自ら体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児を育てることにつながると感じた。